二十人の親戚が長崎で犠牲に

岸和田市　平野　静香

私は昭和六年生まれですから、終戦のときは十三歳、国民小学校の六年生でした。

戦時下の様々な事柄を、子どもの目に映った様々な事柄を、思い出すままお話してみます。私たち家族（両親と弟）は、当時父の仕事（建具の職人）の関係で、和泉市南池田に移り住んでいました。いわゆる余所者ですから、炊事の水も貰い水という状態だったので、両親特に母の気苦労は、丈夫な体でもなかったので大変だったでしょう。

特に食糧を得るための苦労が大変でした。幸い父の仕事の建具の注文などは、細々ながらありましたが、それはそのままお米に代わってしまいますから、母は松の木を切り出した山を借り、松の根を掘り起こして、そこにさつまいもや野菜を作って主食にしていました。麦八・米二のごはんかおいも、おかずはぜんまい・わらび・大根の葉・さつまいもの茎・大豆。私はさつまいもが嫌いで、ご飯を食べたいといって母をよく困らせました。

ごく稀に魚・肉・りんごなどの配給がありました。コロってご存知ですか？今は貴重品になってしまった鯨の白身のことです。鯨を七～八cm位に切り大きな鍋でからいりをして油を取り、てんぷら油にするのです。いやーな匂いがしましたね。和泉の奥の父鬼で炭を買って、大阪へ売りにいったり、育ち盛りの子どものために両親はそんなこともしてました。まっ白いごはんを、おなかいっぱい食べたかったですね。

私が通ったのは納花国民小学校で、一学年一クラスで五十七名でした。教科書が買うにもなかったので、上級生から借りて写しました。それもノートではなく、わら半紙というざら紙を綴ったしろものでした。でもその頃には授業もほとんどなく、毎日竹やりの訓練・担架の作り方・包帯の巻き方・三角巾の使い方などの練習をしていました。そのうち、学校を兵隊さんに明け渡してしまい、私たちは出征兵士の家へ一人づつ勤労奉仕に行き、田植え・田の草取り・山の草けずりなど手伝いました。休日には早朝から母と山へ行き、まぐさ（兵隊さんの馬に食べさせる草）を刈りました。乾燥させたものを、一軒ごとに供出しました。

昭和二十年七月、神戸の空襲で親戚の人がなくなりました。その二十日、母は長崎の姉を訪ね、三十日夜行で帰阪しようとしていたとき、眠っていた三歳の甥が起きだし、舌もまわらないのに、「大阪へ行く」といってきかないのです。そんなに行きたがるのなら、と着の身着のままで連れて帰って着ました。そして九日、長崎に原子爆弾が投下。

以来、全くの音信不通。十五日、思いがけない終戦。八月の末、鳳駅で徹夜で並んで、やっと切符を手に入れ、父母は三歳の甥と長崎へ向かいました。二十四時間の行程が一週間かかって、やっと到着。長崎は全くの焼け野原！　あの日から一ヶ月近く経っているのに、あちこちに死体が残っていて、蛆がわき、群がった蝿が一歩歩くたびに舞い上がり、漂うたまらない腐敗臭！　この世の地獄です！　きれいな布団が落ちていると思ってめくってみると死体が…

母の姉の家、つい先日訪ねたばかりの家は跡形もなく、バラック小屋が建っていました。その小屋に、終戦直後に海軍から復員してきた姉の三男が居て、事情を知ることが出来ました。彼の手で荼毘にふしたという、一家五人のお骨が箱に入れて祀られてありました。

母の兄の一家七人は即死。姉の一家は即死は免れたものの、放射能のため、八月二十八日に次女・九月二日に五男・三日に長女・五日に四男・六日に姉と、次々に亡くなりました。彼がみとることができたのが、せめてもの救いでした。焼け残った木切れを集めて枠を組み、家族の遺体を乗せて荼毘にふした彼の心情はどんなだったでしょうか…

そんな訳で、両親たちは死に目に会えなかったのです。もう少し早く着いていればと、どんなに悔やんだことかと、母の悲しみが思いやられます。

主人も父親を原爆でなくしています。戦後の混乱で、遺骨の埋葬場所がわからなくなってしまったのです。ずっと後年になりますが、主人が高校一年生の娘と探しにいったのですが、結局遺骨はわからず、墓地であったと思われる所に朽ちた十字架をみつけたので、その土だけを持って帰ってきました。その土は今、主人の眠る墓に納まっています。

母の父も十年後、原爆病でなくなりました。

両親はいとこどうしで、五島列島の出身なんです。長崎市内に移り住んでいた親戚二十人が、原爆の犠牲になったのです。後年広島・長崎の惨状を本や写真、体験談などを見たり、聞いたりするたびに、なぜこんな恐ろしい兵器を人間が作ったんだろうと、怒りがこみ上げてきます。今年はあの方たちの五十回忌。心より冥福を祈りたく思います。

（聞き書き）